



モーセの試練 ポッティチェリ

エジプトで殺人を犯したモーセはファラオの追及の手を逃れて、また、同胞の猜疑の目を逃れて、異教のミディアン地方に辿りつき、井戸の傍らに腰を下ろしていました。そこへ羊に水を飲ませるために 7 人の娘たちがやって来ました。ところが羊飼いの男たちが娘たちを追い払ったのです。モーセは娘たちを助け、水を飲ませてやりました。娘たちは家に帰り、エジプト人が助けてくれたと父に伝えました。父は話を聞いて喜び、モーセを呼びに行かせました。モーセはこの人の所に身を寄

せることにしました。娘たちの父はエトロ(別の名前でも記されている)といい、遊牧民・ミディアンの祭司であり、羊を飼っていました。エトロは姉娘のツィポラをモーセに妻として与えました。二人にゲルシヨムとエリエゼルの息子が生まれます。

モーセは舅エトロの羊を飼いながら異郷・異教の地で悶々と暮らしていました。ある時、羊を追って、荒野の奥地、神の山ホレブ(シナイ山)にやって来ました。そこで、神の声を聞くのです。それは「わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」という声です。その時モーセは「神とはいったい何者なのか」、「主がお前などに現れるはずがないと同胞から信用されない」、「ファラオに対抗する手立てがない」、「私は口下手だ」と必死に抵抗します。神はそれらの逃げ口上に丁寧に対応し、モーセを励まし「出エジプト」の使命を与えるのです。



神の山ホレブまたはシナイ山

モーセは妻子を連れて、エジプトに戻ります。ツィポラはエジプト人と思っていた夫がイスラエル人だと知って、驚いたことでしょう。帰郷の旅の途中に事件が起きました。モーセが死にかけたのです。

ツィポラは、とっさに石刀を手にして息子の包皮を切り取り、それをモーセの両足に付け、「わたしにとって、あなたは血の花婿です」と叫んだので、主は彼を放された。(出エジプト 4:25)

ツィポラは助けたい一心で、「割礼」の包皮をおまじないのオフダのようにモーセの足に付けたのです。彼女の信仰はヘブライ人の信仰とは違っています。けれども夫の信仰を大切に考えた結果でしょう。石刀を使ったとは、あまりに原始的で、ツィポラの文化的背景が暗示されているような気がします。そして、彼女の「血の花婿」という言葉の意味が不明ですが、血とはやはり、命を懸けているという意味でしょう。モーセを愛していたことの証でしょう。モーセは助かりますが、どうやら、その後、モーセは妻子を故郷のミディアンに帰しています。エジプトを脱出できた後に、父エトロがツィポラと二人の息子を、荒野の旅をしていたモーセの元に連れて来ます。ツィポラはイスラエル人ではありませんから出エジプトの必要はなかったものの、その後苦しい旅を異民族と共にした苦労は大変なものだったでしょう。

後にモーセはクシュの女性を妻にしていると兄アロンや姉ミリアムから非難されている記事が出てきます。

ミリアムとアロンは、モーセがクシュの女性を妻にしていることで彼を非難し、「モーセはクシュの女を妻にしている」と言った。(民数記 12:1)

ツィポラが死んだとか、モーセが再婚したということが記されていないので、ツィポラはクシュ(エチオピア)の女性のように肌の色が黒いということだったのではないかと想像します。けれども、それを非難した兄、姉が「心得違いだ」と神の裁きを受けています。ツィポラの肌の色がどうであれ、彼女はミディアン人の個性を持った、モーセに従順な妻でした。けれどもモーセ一族から浮いた存在でした。モーセは舅エトロからは多くを学びますが、ツィポラ存在感は薄く、彼女の記事はその後何もありません。やがて、イスラエルとミディアンは対立関係になり、戦争も起こり



モーセとクシュの妻 Jacob Jordaens

ます。(民数記31:1)モーセの関心はツィポラではなく、イスラエルの民を共同体としてまとめて、カナン之地へ連れていくことだけでした。彼らの子どもたちも、モーセの兄アロンの子に比べて活躍の場はさほどありません。仕事第一の夫を持つツィポラには孤独な妻のイメージがあります。